

SHINGON HORONIC
色 は 句 へ ど Ⅱ

IRO WA NIO E DO



関根祥丸の舞い姿

関根祥六古希記念三代能

「岩船」

特集 古典に学ぶ日本の教育 1 能

平成十八年正月 第三卷



うるわしく咲く花でも
香りが無いものがあるようには
善くとかれた言葉も
それを行わない人には実りがない
あでやかに咲く花で
しかも香りのあるものがあるようには
善く説かれた言葉も
それを行う人には実りがある

道しるべ チェンジメーカー

古典に学ぶ日本の教育法

第一回 お能 3



ジャータカ物語 きつねとつるべ 9



お大師さまの言葉

情報コーナー

13

11

14



遊ぶ・学ぶ・創る、癒される
見るおもちゃ箱

古典に学ぶ日本の教育法一

お能 関根祥六氏に聞く

今日は斯道七十周年という、能一筋に歩んでこられた関根祥六先生に「いかに伝えるか」というテーマでお話を伺いました。

関根祥六先生は昭和五年十月二十八日生まれ。五歳で初舞台を踏まれ二十一歳の時に観世宗家に内弟子として入門されました。

その後多くの舞台を踏まれ、「石橋」「道成寺」「卒都婆小町」などの大曲を演じ平成十三年には能の最高峰と呼ばれる「関寺小町」を上演。また親子孫によるとても稀な三代能を平成十二年に実現され現在も年に一度上演されています。御子息の祥人さん、お孫さんの祥丸さんと三人で「船弁慶」を上演。また平成十六年にはNHKにて「鳥帽子折」も放映されました。核家族化や少子化と言われる中で、何かを伝承することが難しい現代です。その社会にあって見事に「能」を伝え続けています。

「能」は今から六百年も前に観阿弥、世阿弥親子によって、世界でも類を見ない芸術として完成されました。平成八年には世界無形文化遺産としても登録されました。その世阿弥は「風姿花伝」を初め数多くの「能」を教え伝える書を著しています。「風姿花伝」の中には「秘すれば花」という有名な言葉もあります。

関根先生のおうちでは、「風姿花伝」に従つてお稽古を始めるのでしょうか。

関根 「風姿花伝」の「年来稽古條々」のことですね。二十歳のころから読みだしましたが、結婚して子供ができるて、祥人ですね。やがて稽古をするわけですが、なかなか現実には書いてある通りにはいかないですね。もちろん書かれていることを骨にしますが。たとえば声変わり(祥人はなかった)の頃には余り公の場には出さぬようとにかく。ですから、内なる心、気魂と云う様な内面的修行。又、謡、ハヤシを覚えるとか。その様な時期となりますね。



実際の稽古は「風姿花伝」にある七歳、当時は數えですか
ら今の六歳から稽古を始めたのでしょうか？

関根 祥人は二歳頃から稽古を始めましたね。祥丸は二歳過ぎ頃からですので「舞台に出るのがお父さんに負けた。」つて言つてましたが負けた勝つたではなく、その時期にまたまそういう会があるかどうかですか？

ただ関西の方なんかもそうですけど昔から六歳の六月六日から稽古を始めるといいますね。大鼓の大倉榮太郎君が六歳の六月六日にうちに入門の挨拶にお母さんと来てくださいました。

うちではそういうことではなく、お風呂に入りながらでも散歩しながらでも謡を謡っていますから。祥人の場合ですけど童謡を三十曲以上歌えるようになつたので、おやこれは大丈夫かなと思って、謡の稽古を始めたわけですが、子供は直ぐに覚えるものですね。

稽古や教えることで大切なことはなんですか？

関根 「風姿花伝」を逐一みてということではないですね。そのままの子の状態を見て稽古をしないと。稽古はキャッチボールと同じだと思います、投げたボールがとれなければいけませんし、また返つてこないとね。また難しいボールを投げて取れないこともあります。すると手を出さなくなるのでは・・・。そのところをこちらがまた分からないと、稽古にならないですね。時・時が大事です。相手がボールが取れなければ、とれるようなボールを投げる、これが取れなければもつと優しく投げてみようとかね。でもこれは駄目です。

逆に一回取れたものを次に取らないのは、怠けてるわけです。プロとして生きるわけですから一定のレベルまでこななければいけないですね。導くというのは一定のレベルまで連れてくることですから。分からなければレベルを下げるという最近の風潮もありますがそれは「導き」ではないと私は思います。お素人の方には先ず楽しんで頂く。でも正しい楽しみ方の方が私は好きですね。そしてそこまでくると能の面白さ素晴らしさが分かるのでぜひきて欲しいですね。

今はなんでもレベルをさげて一般化、大衆化をしますがお能は難しいですね。

関根 稽古は摩擦です、と私はよく言うんですが。覚えていても稽古をする。何度も何度もするうちに摩擦がおきて、やがて煙が出てくる。そして炎があがります。その炎の状態が舞台ですので燃える火もあれば、しょぼしょぼのもありますね。稽古を重ねているうちに発見や新たなものが生まれます。その燃え滾つたものが見る方に響く、そこが魅力なのです。

芸事は説明できないところが沢山あります。例えば二つの皿に砂糖と塩を盛つてこちらは塩、こちらは砂糖。そして塩はシヨツパイ、砂糖はアマイまでは教えられる。しかしシヨツパイは何ですか・・・。これは説明できません。あとは稽古、何回もナメる事ですね。

能はまず品位が大事です。そして簡素化と様式美です。この型木へはめ込むことが大事です。



【道成道】シテ関根祥六 撮影 前島久男

「風姿花伝」には個性をのばすように書いてあります。がお能は型も大切ですが、その型の中で個性はどのようにのばしていくのでしょうか？

関根 徹底的に型を教えます。それでも自然とその子なりのものが出てきますね。それをそつとしておきます。悪く出る事がありますのでそれは直します。まずは「人形」になる事ですね。文楽とは反対の勉強です。

品位も自然と出でますか？

関根 品位はああしなさい、こうしなさいではないですね。型をしつかりする中から生まれますね。まず約束事、本来の型をきっちと体にしみ込ませる事が大事です。ですから稽古の曲目も脇能という神様のものから始めます。祝言でめでたいと言う心だけでの曲です。面白くもおかしくもないようですがしかし、それが基本の型をきっちと作り上げる事になりますから徹底的にそこを稽古させますね。

能の三番目物四番目物になると人間の情念が必要となります。悲しい恋しい、そういう味とか面白さを若いころに身につけようとすると品位・様式美・深みなどの能本来の形が心身共に崩れ生涯におよびます。

(編集注　お能は五つの演目で一日が組まれている。初番目は脇能物とも呼ばれ神仏への祝言などが演じられる。「高砂」。二番目物は修羅物ともよばれ修羅道に落ちた武者が救いを求めるもの。「清経」「実盛」。三番目物は髪物とも呼ばれ美しい女人が主人公で恋のはかなさや生命のはかなさを幽玄に謡う。「井筒」「松風」。四番目物は狂女物・現在物とも呼ばれ人間の情念や執心・物狂いなどが演じられる。「安宅」「隅田川」「葵上」。五番目物は鬼畜物・切能物ともよばれ鬼神、蜘蛛、虎、獅子等が登場する。「石橋」「土蜘蛛」「猩々」)。

お能は現代人には難しい言葉が沢山あります。小さなお子さんが学ぶ時に、言葉の意味を教えるのでしょうか？

関根 私はまったく教えませんから子供らしい誤解もありますね。船弁慶で義経と静御前が別れる場面で「おん別れ」は音便で「おんなかれ」と謡いますね。祥人はずつと「女」と「彼」が別れて行くと思っていたそうですから。

秘伝や口伝も沢山あります。先人の思は素晴らしいです。しかし演じる時は、今この瞬間にその出来事がおこっていると思って演じてますね。たとえば「隅田川」の能ができるのが六百五十年前。しかしその事件は能ができるさらに百五十年前のことと聞いてます。単純に計算してもいまから八百年も前のことです。それを伝承としてやっていたのでは生ききません。平成十七年の今この四本柱の中で起こっている出来事として演じないと。御覧になる側も・・・。

魑魅魍魎や鬼や獅子などはどういうに教えていきますか。

関根 脳能を徹底的にする中で、その表現もできますね。ただ狐だからといって



古希記念三代能

ピヨンピヨン飛べばいいと言うものではないですか。面をかけると大変な制約や孤独感がありますがそれだからこそ逆に別世界に入れますね。その世界を覚えると現在物（面を掛けぬ曲）もできるようになりますね。

お能は足利義満の時代から広まり戦国時代には多くの武将が嗜むようになりますが、そのように拡がつていった原動力はなんでしょうか？

関根 能には生きるための教えがたくさんありますね。仏教の話も多いです。たとえば「石橋」寂昭法師が旅をしていると石橋に出会う。「これが有名な石橋」「では渡ってみよう。」すると老人が、「お待ちなさい。百獸の王の獅子でさえ小さな虫を取るとき十分準備して全力を傾けるのに、行くことも難しい石の橋をちょっと渡ろうと言うのは何ごとですか。」とかね。

「西行桜」にもこんな言葉がありますね。都の雜踏を逃れて嵯峨に移る。ところが桜の季節になると桜を見に大勢の人があつてくる。西行さんは歌を詠む。

『花見んと 群れつつ人の来るのみぞ あたら桜の咎にはありける』

すると桜の精が出てきて「桜の咎」とは何ごとですかと、西行さんを問いつめます。あなたはなんでも人のせいにする。『山に行けば松風がうるさい。

海に行けば波音がうるさい。それではだめでしょ』とね。桜の精は『憂き世と見るも山と見るも、ただその人の心にあり』と諭し春の宵に舞を舞い、しらじらと明け行く夜を惜しむ能。深い教えがありますね。

御自身が入門されてからのことでもお聞かせいただけますか。

関根 つらいこと悲しいことがあつたら月と話せと入門の時にいわれましたね。この言葉はとても有難かったです。自然に話し掛ける事を覚えました。

「眼に映るもの心に浮かぶものを芸に取り入れろ」と先々代からの言葉。でもなかなか初めはわからなかったです。芸に取り込めないです。『富士山の美しさ』、なぜ美しいのかと問い合わせる時代もありました。富士が教えてくれました。三百七十メートルでは美しくない。三千七百メートルだからだと。しかしだだ高いだけではだめだよ。広い裾野があるから美しいと。東海道線で富士を見ますね、ある時は雪景色、また見えない時もあります。こういうことが『秘すれば花』ということかなと思つたり。あるとき朝やけの真っ赤な富士山を夜行列車の中から偶然見ました。ほんの一瞬でした。まさに出会いですね。同じ形でも異なる色を持たなければ面白くないとも教えてくれましたね。芸が正しくそうですね。

最後に「秘すれば花」とはどのようなことでしようか。

関根 羽衣の稽古の頃ですから二十歳代ですね。お役を頂いて。今と違つてテープだけですが聞いてみると関根祥六が一生懸命やっていますが、肝心の天人がどこにもいないんですね。自分を消え失せれば天人が出てくる。今の時代は自分を出しますがね。能は逆ですね。然し秘めてばかりではこれ又いけませんが・・・。



関根祥人 天津公演で



関根祥六氏

昭和5年10月28日生まれ

昭和10年初舞台

昭和47年重要無形文化財総合指定の認

定を受ける

平成8年紫綬褒章受賞

平成14年芸術院賞受賞

関根祥人氏

昭和34年生まれ

昭和36年初舞台

平成10年文化庁芸術祭新人賞受賞

平成13年重要無形文化財総合指定の認

定を受ける

平成17年松尾芸能賞優秀賞を受賞

関根祥丸氏

平成5年生まれ

平成8年初舞台

平成12年初シテ「岩船」

平成13年三越名人会「芸三代」

平成16年第18年NHK能楽観賞会

当今は高度情報化社会で子供達は学校や塾や部活動など時間に追われています。そうした社会の中で実際にお子さんやお孫さんのお稽古はどのようにされますか？

関根 先ずそこを外す事ですね。又、長男はもう四十を過ぎておりますからね。稽古は時間で決めていません。今はまだお役があればその稽古をしますね。家の中ではいつも謡が聞こえていますから。先ずは環境でしそうね。

この世のあらゆる環境が人を育てます。先人の言葉を常に大事にと思いますし云つてますね。

ジャータ力物語 きつねとつるべ

絵 美香

とつぜん水の柱が立ち上がり

大地を水が潤しました。

坊さんは焼き物のつるべをおきました。

旅人も農夫も草刈りの娘も喜びました。

「なんて美味しい水だろう。」

夜中に狐の群れがやつてきました。

王様きつねはつるべの水をすっかり飲むと

つるべをたたき割りました。

「つるべがなければ人々がこまりますよ。」

と家来のきつねがいました。

「ふん。人間が困る、わしのしつたことか。」

「井戸をほればだいじょうぶじゃよ。」

お坊さんは地下に流れる水の道をさがしました。
そして一生懸命荒野を掘りました。
何日も掘り続けました。

つるべが壊されたのでお坊さんは新しいつるべを
おきました。
なんどおいてもつるべは壊されました。
お坊さんは木のつるべを作りました。

王様きつねはあざ笑いました。

「木のつるべだって壊せるさ。まず水を飲んで・・・」





つるべが頭からぬけません。もがくほどつるべがきつくなります。

王様きつねは恐くなり泣き出しました。
「だれかたすけてくれ、もう悪さはしないから。」

と声の限りにさけびます。
お坊さんはそれをきくと、

「きつねさん、わかればもういいんじゃよ。
もう泣くな。今とつてやろう。」

王様きつねはその優しい声を聞いて胸がいっぱいになつて涙があふれました。

つるべをとつてもううと月の光であたりが輝いています。

自分のこころも急に明るくなつたようです。
目の前にお坊さんがたつていました。

そのお坊さんの笑顔は月より輝いて仏様のようでした。

道するべ

溢れ出す団塊の世代

社会の矛盾を感じる人。世の中を良い方向に変えたいと思う人。何か人のためになることをしたい人。それぞれたくさんいますが、実際に行動を起こす事は難しいと誰もが感じます。時間が有れば。お金に余裕が有れば。ボランティアも盛んになつてきました。

しかし大切な人々の善意やせつかく集まつたお金をいくら注ぎ込んでもうまくいかず無駄になつてしまふことがあります。

社会起業家・ソーシャルアントレプレナーという新しい考えが注目されています。ソーシャルベンチャーもとも呼ばれています。ソーシャルつまり社会福祉と利益目標の起業アントレプレナーの両立。この一見相反する事業を見事に成し遂げた人々がいます。不登校児向けの単位認定型フリースクール校長。紛争・危険地帯解に導くシナリオライター。紛争国家を和解の赤ひげ先生。社会起業家が世の中を変えていきます。社会貢献や社会福祉が経済的に持続可能であり成長が実現されれば誰でも将来に希望が持てます。年金や医療費などで増税論議が盛んですが、もつと豊かな社会を創造するビジネスモデルも実現可能です。

『チェンジメーカー　社会起業家が世の中を変える』

渡邊奈々 著　日経PB

社会起業家・ソーシャルアントレプレナー達を初めて日本に紹介する本です。今年読んだ本は二百冊ぐらいですが最高の一冊です。実際に社会を善き方向に変えて行く新しい21世紀型ビジネスが紹介されています。一人でも多くの人が本書を通して社会起業を理解していただき、日本から沢山のソーシャルアントレプレナーが生まれることを期待します。写真家である著者が紹介する社会起業家達の顔の輝きは素敵です。

金子郁容氏の解説も秀逸です。



印度では人生を四つの期間にわけています。
第一「学生期」多くの学問をおさめる期間です。
第二「家住期」家庭を築き、子供を育み、社会ではたらく期間です。
第三「林棲期」家督を譲り、社会的な地位からも離れます。そして林に棲み自分の内面と向き合い、自然と宇宙の真理を求める期間です。
第四「遊行期」聖地などを巡礼し最期を迎えます。

いよいよ高齢化社会が現実になります。正確にはすでに始まっています。六十五歳以上の人口が全人口の7%を超えると高齢化社会。十四%を超えると高齢社会といいます。すでに日本では平成六年に十四%を超えました。しかし団塊世代がこれから定年を迎えます。日本の高度成長期をなってきた人々が、長年勤めてきた会社や組織を離れていきます。会社に勤めはじめてから約三十年から四十年、人生の過半を過ごした場所からほとんどの人が退場します。時間とお金がもつとも自由になる世代が登場します。チェンジメーカーの良き候補者でもあるはずです。

団塊の世代のこれから生き方について聞かれることが最近とても多くなりました。

団塊の世代はこの中の第三「林棲期」から

第四「遊行期」に入ったと考えていいと思います。実際には林に棲んだり、遊行は難しいはずです。

しかし豊富な人生経験と社会で培った智恵はかけがえのない宝です。日本が資源の乏しいなかで高度成長を実現できたのは人の力です。団塊の世代が新たな活躍の場を広げることで、日本の未来はさらなる可能性の扉を開くはずです。

現代では六十歳以上の世代の人々が老年期に入つたという実感を持つ人はいないと思います。世論調査でも七十五歳ぐらいの人々が老人のイメージをもつと高齢の人を持つています。

実際に見ていても実年齢よりも若々しい高齢者が増えていますし心身共に健康な人もたくさんいます。

そして子育ては終わり経済的には一番余裕

ができます。

一方では長年親しんだ会社や組織から離れたことによる、疎外感や将来の健康ややがて訪れる最期の時への不安もあります。

今まで一日の時間も一週間の過ごし方もすべて会社や組織が決めていました。また会社などの業績をあげ、評価をあげることが人生の主目的になっていました。

会社などから離れると一日の時間も一週間の過ごし方になりますが、その自由が

意外と難しいといいます。

自由な時間を自分でうまく使うことができなかつたり、一週間が無為に過ぎたりするそつです。

警察を退官された方が「最初の半年は大変でした。精神的にも体も張りがなくなつてしまつて。病気になるんじやないかと思いつきました。再就職してまた元気になりましたけど。」と言わっていました。

意外と自由に生きるというのは難しいよう

です。

このもつとも豊かな年代。社会経験、人生経験、そして経済的にも豊かな人々が、その豊かさの一端を社会還元でくる社会システムができれば社会全体が活性化して日本の未来は明るくなります。そして団塊の世代が活躍できる場が増えることで団塊の世代もまたより豊かに生きることができます。

団塊の世代ができるることはたくさんあります。何よりも社会全体のさまざまなセーフティネットになればと思っています。

子供を持つ働く女性達を支援し安心して

働ける環境ができることで出生率があがります。

教育のセーフティネット

社会経験豊富な大人が教育現場では必ず生きるはずです。

更正保護のセーフティネット

犯罪の低年齢化と増加の一方で保護司の数はなりません。また登下校時の子供の安全も不安ですが団塊の世代がセーフティネットになれます。

緑と自然のセーフティネット

環境問題も深刻です。荒れる森林や棚田も人の手が入れば見違えるように生き返ります。

団塊の世代や高齢者が生き生きと輝き、素敵な生き方をすることが若者や子供達の良き見本となります。



『希望の美術 協働の夢 北川フラムの40年』 角川書店

新潟県で『越後妻有 大地の芸術祭』が毎年開かれています。一年の半分が雪に閉ざされる過疎地。

東京都23区を上回る広大な6市町村で開かれる芸術祭に16万人もの人が訪れます。その総合プロデューサーが北川氏。まさに団塊の世代。そして幅広い氏の40年の軌跡が一冊にまとめられました。

お大師さまの言葉

過ちをゆるして、新ならしむるこれを寛大といい

罪を宥めて 脣を納むるこれを含弘と称す

苦を見て悲をおこすは觀音の用心

危うきを視て身をわするは仁人の努むるところなり

昔からいじめもあり、いじめっ子がいました。しかし今ほど陰湿ではなかつたはずです。子供の世界だけではなく地域社会や会社や団体でもいじめがあるといいます。

いじめにたいして「みんなで仲良くしましよう。」といいます。しかし「みんなで仲良くしましよう。」がいきすぎることもあります。前にも書きましたが一部の小学校の運動会では徒競走で順位をつけないとという話を聞いて驚きました。先頭の子供は後の子供達をまつて、みんなで仲良く手を繋いで、みんな一緒にゴールするそうです。

こうした教育が行き過ぎればみんなと少しでも違えば「みんなと違う子」「みんなと仲良くできない子」というレッテルを貼られて「みんなが仲良くその子を仲間はずれにしていじめる。」といいういじめの構造が出来上がります。人の小さな過ちにも許せない人が多くなると社会の明るさが消えていきます。

人は他人との違いを知り学ぶことから人間の幅が培われます。競い合うことから学び成長できるものがたくさんあります。

お大師さまは

「人の過ちをゆるして更正させることを寛大、

人の罪を十分に認めてゆることから含弘

人の苦しみをみて慈悲の心が生まれることは觀音さまのはたらき

そして人の危きを見て我が身を忘れて救うのは人の上に立つ者の努め。」と言われています。

千二百年前のお大師さまの言葉には今に生きる教えがたくさんあります。お大師さまはいつも歩いて考え、思想を深めていきました。京都には哲学の道もあります。歩きながら考えるといい発想が生まれます。



『歩きながら考える』

鶴見良行著
太田出版



『世界のおもちゃ100選』0~100歳まで

トライプラス編著 中央公論新社

子供達のお正月の楽しみは「お年玉」です。「お年玉」をもらって近所のおもちゃ屋に行く時のわくわくする気持ちは格別です。「お年玉」でゲームのソフトを買う子供が多くなりましたが、「おもちゃ」の魅力は年齢を超えて惹き付けるものがあります。

世界中から「バウハウスの積み木」や「みつろうのねんど」「万華鏡」「紙作りせっと」等々。まさに100歳まで楽しめるおもちゃが満載。



『尾形光琳』江戸の天才絵師

飛鳥井頼道 ウェッジ

尾形光琳の研究が進んでいます。金箔に見えるところが、実は金箔に見せるために絵筆で書かれていたり、新しい発見が続いているようです。

江戸時代を駆け抜けた天才絵師、尾形光琳の絵が美しいカラーで数々収録されています。MOA美術館にある「紅白梅図屏風」根津美術館の「燕子花図屏風」等々。

小説ですが光琳の姿が鮮やかに浮かび上がります。



『われわれはなぜ死ぬのか』

柳澤桂子 草思社

「36億年の生命の歴史のなかに時をおなじくして自己意識と無を認識する能力をあたえられ、死の刻印を押されたものとして、また、死をおそれることを知ってしまったものとして、おたがいに心を通わせ合い、深く思いやることが、生の証のように思えるのである。死ばかりでなく、老いもまた避けることのできない私たちの運命である。個体の寿命がのびたことによって、老いの苦しみを感じる期間も長くなっている。老いていく人々の苦しみを思いやるとともに、そこから多くのものを学びたいと思う。」本文より

若くして難病を患い難病と向き合いながら綴られる生命科学者の珠玉の一冊。



次号 特集 寺子屋真言童子 香に聞く

Editor ABE RYUJU Art Director and Photographer/TATSUKI Editorial Staff/ SAMURO MIWA SHU TACHIBANA

EDITORIAL OFFICE CHOEN-JI S.H.C Making Mechanic Printing KORINKAKU

〒157-0076 東京都世田谷区岡本1-20-1 電話 03-3707-1228 ファクシミリ 03-3707-1221